

## 劉白聯句訳注稿（十八）

橘 英 範

はじめに

本稿では、前号に引き続き、⑨「喜遇劉二十八偶書兩韻聯句」の残りの部分に語釈を施すこととする。

### ⑨「喜遇劉二十八偶書兩韻聯句」（つづき）

#### 【語釈】

7・8 高位當金鉉、虛懷似布衣

「高位」高い位。宴会の主人である裴度についていう。「参加者」の部分でも触れたが、当時裴度は中書令を加えられたばかりであった。

ことばの用例は、古く『春秋』莊公二十二年の『左傳』に「敢て高位を辱<sup>かたじけな</sup>くして、以て官の謗<sup>そと</sup>りを速<sup>はや</sup>かんや（敢辱高位、以速官謗）」と見え、また『孟子』離婁上にも「是<sup>こゝ</sup>を以て惟<sup>た</sup>だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。不仁にして高位に在るは、是<sup>こゝ</sup>れ其の惡<sup>あく</sup>を衆<sup>あ</sup>に播<sup>ま</sup>くなり（是以惟仁者宜在高位。不仁而在高位、是播其惡於衆也）」と見える。前者は、齊の桓公が陳の公子完（敬仲）を卿にしようとしたのに対し、公子完

が辞退した時のことばにおける例。後者は、仁の心を持つものだけが高位につくべきで、不仁のものが高位にあれば民衆に害毒をまき散らすことになる述べた例。

唐までの詩においては、嵇康の「與阮德如」（『嵇康集』一）に「榮名は人身を穢<sup>けが</sup>し、高位は災患多し（榮名穢人身、高位多災患）」と、意を得ず官を去った阮侃に対し、榮達は必ずしもよいものではないと慰めた例があり、また左思の「詠史八首」其二（『文選』二二）に「世胄<sup>せう</sup>は高位を躡<sup>ふ</sup>み、英俊は下僚に沈む（世胄躡高位、英俊沈下僚）」と、貴族の子弟が高位に昇り、才能ある人物が低い地位に甘んずる状況を詠じた例がある。

唐に入り、宋之問の「送楊六望赴金水」（全五三）に「台階 高位有り、寧ぞ復た臨邛に久しからん（台階有高位、寧復久臨邛）」といい、岑參の「送張獻心充副使歸河西雜句」に「未だ三十に至らずして已<sup>す</sup>に高位、腰間の金印 色緒然たり（未至三十已高位、腰間金印色緒然）」というなどの用例がある。前者は、金水（四川）に赴く楊望に対し、高い地位があいているから四川に長く留まることがないようにと勧める例、後者は、若くして節度副使となり、金印を帯びることになった張獻心

を称えた例。

劉には他に一例、この聯句の四年前、大和五年(831)の「哭龐京兆」0339に、「逢ひし時 已に自ら高位を致し、疾ひを得て還た因りて少年に倚る(逢時已自致高位、得疾還因倚少年)」という。亡くなった龐嚴が若くして高位に昇ったことを表現した例。

白には二例、「閑居」0234に「富貴 此の中に在り、何ぞ必ずしも高位に居らん(富貴在此中、何必居高位)」といい、「喜入新年自詠」3571に「歳月を銷磨して高位を成し、時流に比類すれば是れ幸人(銷磨歲月成高位、比類時流是幸人)」という。前者は壮年期の元和六年(811)、下邳服喪時の作、知足の境地にいれば富貴と同じであり、高位に登る必要がないと述べる例。後者は最晩年の會昌二年(842)、洛陽にて致仕する直前の作、長い年月をかけて高位に至ったと、来し方を振り返った例。

〔當金鉉〕〔金鉉〕は金色の耳づる(鼎の兩耳に通して持ち上げる道具)。鼎には三本の足があることから、人臣の最高の地位である三公の象徴とされた。三公は周代以来指す内容に変遷があったが、後漢以降は大尉・司徒・司空をいう。唐代ではこれらは名目上の官に過ぎなくなっており、眞の宰相と見なされたのは、中書令と侍中だけであつたとされる。すなわち、裴度が中書令となつたのを三公になぞらえて表現したものである。

諸注も引く『周易』鼎卦の六五の爻辭に「鼎黄耳にして、金鉉あり、貞しきに利し(六五、鼎黄耳、金鉉、利貞)」とある。やはり諸注も引

く潘岳の「西征賦」(『文選』一〇)に、自身が三公の一つである太尉の地位にあつた賈充に招かれ、衆官の功績を帝室に報告する役目についたことを「旌弓を鉉台に納れ、庶績を帝室に讃す(納旌弓於鉉台、讚庶績於帝室)」と表現する。その李善注に、先の鼎の六五の爻辭を引き、さらに鄭玄の注に「金鉉は、道を明らかにして能く君を擧ぐるの官職に喩ふるなり(金鉉、喻明道能擧君之官職也)」という記述と、鄭玄の尙書注に「鼎は、三公の象なり(鼎、三公象也)」というのを引くのも、諸注に引かれる通りである。

潘岳に先立つ例としては、後漢の張衡の「司徒呂公誄」(『藝文類聚』四七)に「黄耳にして金鉉、公の餽以て盈つ(黄耳金鉉、公餽以盈)」という句がある。呂蓋が三公の一つである司徒に昇つたことを表現したもので、後の句の「餽」は鼎の中の食べ物、やはり『周易』鼎卦に基づく表現。

以上のように、「金鉉」の語は文章には散見するが、詩における用例は少なく、唐までの詩に用例がない。唐詩においても、この聯句の他には、劉の「浙西李大夫述夢四十韻、并浙東元相公酬和、斐然繼聲」0917に「門は承く 金鉉の鼎、家には有り 玉璜の韜(門承金鉉鼎、家有玉璜韜)」という例が一例あるのみ。この聯句に先立つ寶曆元年(825)、和州刺史時代の作。李德裕の父の李吉甫が宰相であつたことを表現した句、玉璜を釣り『六韜』を著したという太公望呂尚と子の呂伋の故事を対にしている。

〔虚懷〕わだかまりのない心。虚心坦懷。裴度についていう。

蔣注も引く沈約の「齊故安陸昭王碑文」(『文選』五九)に「僚庶を撫して盛徳の容を盡くし、士林に交はりて公侯の貴を忘る。懷ひを虚しくして博く納れ、幽關洞り開く(撫僚庶盡盛徳之容、交士林忘公侯之貴。虚懷博納、幽關洞開)」という。安陸昭王蕭緬の気さくな人づきあいについて表現した例(「納」字を胡刻本は「約」に作るが、諸注釈書が四部叢刊本・足利本によつて改めるのに従つた)。なお、李善の注は鄒潤甫の「爲諸葛穆答晉王命」に「博納と曰ふと雖も、懷ひを虚しくして下に開く(雖曰博納、虚懷下開)」というのを引いている。

また『世說新語』簡傲に、「先に粗く虚懷を経るも、乃ち常に異なる無し(先粗經虚懷、而乃無異常)」という例もある。桓温と謝奕が心を開いてつきあつていたことを表現した例。

詩における例は少なく、唐までの詩には一例が見えるのみ。王胡之の「贈安西庾翼」(『文館詞林』一五七)に「我を廢てて冲しきに處り、懷ひを無假に虚しくす(廢我處冲、虚懷無假)」という。沈約・『世說』の交際に関する例とはやや異なり、無爲の政治を行うよう勧めている部分で、真に対して心を開くことを表現しているようである。

唐に入ると、虚藏用の「宋主簿鳴皋夢趙六、予未及報而陳子云亡、今追爲此詩答宋、兼貽平昔遊舊」(全九三)に「舊感と新悲と、懷ひを虚しくして 昔時に酬いん(舊感與新悲、虚懷酬昔時)」といい、杜甫の「贈王二十四侍御契四十韻」(『詳註』一三)に「眼を洗ひて輕薄を看、懷ひを虚しくして屈伸に任す(洗眼看輕薄、虚懷任屈伸)」というなどの用例が散見するようになる。前者は、趙六(元亮)と陳子(子昂)の死による胸中の悲しみをすっかり打ち明けることにより、宋主簿(之

問)ら旧友に報いようと述べたものの、後者は王契が榮達も零落もこだわりのない心で受け入れることを、冷靜に世間を見つめる自己と対して表現したもの。

劉にはもう一例、大和六年(832)の劉白唱和詩「早夏郡中書事」(879)に「懷ひを虚しくして 病苦を詢ひ、律を懷ひて 剽輕を操る(虚懷詢病苦、懷律操剽輕)」という例がある。自らの蘇州刺史としての仕事ぶりを詠じたもので、州民に対して病苦を尋ねる態度の公平さを表現するのに用いている。

白に一例、元和十二年(817)、江州司馬時代の「潯陽歲晚寄元八郎中・庾三十二員外」1010に「虚懷 僚友に事へ、平歩 公卿に取る(虚懷事僚友、平歩取公卿)」という。都で活躍する元宗簡と庾敬休の様子を詠じた部分、同僚たちとの気兼ねのない交際を表現しているよう。

〔似布衣〕無位無官の庶民のようだ。樞要の地位にありながら、平民のようにあけすけな心である。

「布衣」、柴注も指摘するように、かつて庶民は老人になるまで絹を着ることができず、麻布の服を着ていたため、官位のない人民を指す。これについては『鹽鐵論』散不足に、「古者、庶人は耆老にして而る後に絲を衣、其餘は則ち麻桌なるのみ、故に命じて布衣と曰ふ(古者、庶人耆老而後衣絲、其餘則麻桌而已、故命曰布衣)」とある。

常見の語で、古く『荀子』大略に、貧賤でも立派な行いであつた古代の賢者を表現して「古の賢人は、賤しきは布衣爲り、貧しきは匹夫爲り(古之賢人、賤爲布衣、貧爲匹夫)」という。また、『莊子』讓王

にも、「魏牟<sup>ぎぼう</sup>は、萬乗の公子なり。其の巖穴に隠るるや、布衣の士と爲るよりも難し（魏牟、萬乗之公子也。其隱巖穴也、難爲於布衣之士）」とある。一国の君主が岩穴に隠れたのを、庶民になるよりも困難だと表現した例。

名文として名高い諸葛亮の「出師表」（『文選』三七）にも出仕前の様子を描写して「臣本と布衣にして、躬<sup>みづか</sup>ら南陽に耕す（臣本布衣、躬耕於南陽）」と用いられている。

唐までの詩においては、阮籍の「詠懷詩十七首」其九（『文選』二三）に「布衣にして身を終ふべし、寵祿 豈に頼るに足らんや（布衣可終身、寵祿豈足頼）」といい、隨の王通の「東征歌」（『樂府詩集』八六）に「我 國家を思ひて遠く京畿に遊び、忽ち帝王の降りて布衣に禮するに逢ふ（我思國家兮遠遊京畿、忽逢帝王兮降禮布衣）」という。前者は財産によって身を滅ぼすより庶民の暮らしがよいと述べたもの、後者は隋の文帝が無名の自分に会ってくれたことを表現したもの。

唐に入り、駱賓王の「帝京篇」（全七七）に「紅顏宿昔<sup>しゆくしやく</sup> 白頭新たなり、脫粟布衣 故人を輕んず（紅顏宿昔白頭新、脫粟布衣輕故人）」といい、高適の「詠史」（全二四）に「天下の士たるを知らず、猶ほ布衣の看<sup>かん</sup>を作す（不知天下士、猶作布衣看）」というなどの用例が見える。前者は、丞相となった漢の公孫弘が、貧しかった頃の旧友を粗末に扱った故事を踏まえた例、後者は、戦国秦の宰相となった范雎と久しぶりに再会した魏の須賈が、雎を貧しいと勘違いした故事を詠じた例。ともに『唐詩選』に収められた有名な作である。

劉、詩中の用例は他に一例のみ。制作年代未詳（高注は寶曆初年の

作とする）の「題敲器圖」0041に、「上蔡に黃犬を牽くに因無し、願はくは丹徒の一布衣と作らん（無因上蔡牽黃犬、願作丹徒一布衣）」という。富貴にはなったが危険な状況となった晉の諸葛長民が「今日 丹徒の布衣と爲らんと欲するも、豈に得べけんや（今日欲爲丹徒布衣、豈可得也）」と述べたという故事（『晉書』諸葛長民傳）に基づく句、秦の李斯が処刑に際してもう一度故郷の上蔡で犬を連れて狩りをしたかったと嘆いた故事と対にしている。

白には元和年間に二例（0242・0448）、ともに不遇の友人を表現するのに用いている。一方を挙げれば、元和三・六年（808・811）、長安時代の「讀鄧魴詩」0488に、「嗟君<sup>あ</sup> 兩つながら如かず、三十にして 布衣に在り（嗟君兩不如、三十在布衣）」という。不遇のまま夭折した友人が、官職も長寿も得られなかったことを嘆いた例。

主賓として二番目を担当した、劉禹錫の四句のうちの後半部分。前の二句で、客として列席者の風雅を称賛し、感謝の意を表したのを承けて、その高い地位と飾らない人柄を対にして、裴度の人柄を称えている。

前半二句で列席者に対して謝意を述べ、後半二句で裴度に対する敬意を表しており、劉禹錫が主賓として果たすべき役割をきちんと果たした部分といえようか。ここまで主人・主賓の順に担当し、次の参加者の担当部分へとつながって行く。



## 9・10 已容狂取樂、仍任醉忘機

「已容狂取樂」「狂」は思うままに、奔放に、といった意味であろう。今や思う存分に楽しみを追い求めることを自分自身で許して。「已に狂もて楽しみを取るを容れ」と訓読する方がよいとも思われるが、ひとまず佐久節注・柴注の訓読に従った（ただし佐久節注は「容」を「榮」とするテキストに従う）。

柴注、「狂取樂」を世間の規範を逸脱して楽しむこととし、『戰國策』趙策二に「狂夫の樂しみは、知者焉を哀しみ、愚者の笑ひは、賢者焉を戚ふ（狂夫之樂、知者哀焉、愚者之笑、賢者戚焉）」というのを引く。武靈王が臣下の肥義に述べたことばの中の一節で、狂人の楽しみや愚者の笑いが、知者からすると悲しいものであることをいう。

一方、蔣注は、『荀子』君道に「危削滅亡の情、擧な此に積むも、而も安樂を求むるは、是れ狂生なる者なり。狂生なる者は、時を胥たずして落つ（危削滅亡之情、擧積此矣、而求安樂、是狂生者也。狂生者、不胥時而落）」というのを引く。君子としてあるまじき態度を論じた部分、国家の危機に際して安樂を求めるのは狂生というべき者であるという。

以上の例もそうであるように、一般的には好ましくないと考えられる「狂」であるが、一方で、古く『論語』に登場する楚狂接輿以来、魅力的なものと考えられ、様々な文学作品に描かれてきたことについては、佐藤保編『鳳よ鳳よ―中国文学における（狂）―』（汲古書院、二〇〇九年）の大作がある。詳細についてはそれに譲ることとし、以下、詩において「狂」をプラスの方向に詠じた例をいくつか挙げておこう。

唐までの詩においてはその例は少ないが、晉の曹華の「蘭亭詩」（『蘭亭圖卷』本）に「狂吟して適所<sup>まか</sup>に任せ、浪流せん 無何の郷（狂吟任所適、浪流無何郷）」とある中の「狂吟」の語は、心の赴くままに思う存分詩を吟ずる意であろう。

唐に入ると前掲書も指摘する通り、多くの例が見られるようになる。楊師道の宴席に招かれた自分自身を表現した褚遂良の「安德山池宴集」（全三三）の「獨り狂歌の客有り、來たりて歡宴の餘を承く（獨有狂歌客、來承歡宴餘）」の句のように、「狂歌」の語を用いるものが多数を占める。

それ以外の例を挙げれば、王維の「遊李山人所居、因題屋壁」（趙本九）に「世上 皆な夢の如し、狂來たりて 或いは自ら歌ふ（世上皆如夢、狂來或自歌）」という例は、詩題にいう李山人の自由な様子を詠じるのに「狂」を用いている。また、李白の「陪侍郎叔遊洞庭、醉後三首」其一（王本二〇）に「三杯 小阮を容れ、醉後 清狂を發す（三杯容小阮、醉後發清狂）」という例は自らを阮咸、叔父を阮籍に喩えて、三杯飲むと自分を受け入れてくれ、酔っ払うと「清狂」を發するという。「清狂」は王琦注に指摘することく、『漢書』昌邑王傳に用例はあるものの、李白は思いをほしきままにするという異なる意味で用いている。前の句においてではあるが、ことと同じく「容」の文字とともに用いているという点でも興味深い例といえよう。盛唐期には張旭の草書が「狂草」と呼ばれた逸話や賀知章が「四明狂客」と呼ばれた逸話なども伝えられている。

また中唐の詩人たちに大きな影響を与えた杜甫も、自らを詠じた「狂夫」（『詳註』九）の詩を作って「溝壑を填めんと欲するも惟だ疎放なり、

自ら笑ふ 狂夫の老いて更に狂なるを（欲填溝壑惟疎放、自笑狂夫老更狂）」と結んでいる。

劉が詩中に用いた全二二例の「狂」字の用例の中にも、プラス方向で用いた例がいくつか見られる（プラス方向と断言するのが難しいものもあるため、用例数を明示することは避けることとしたい）。そのうち、大和二年（828）の劉白唱和詩「送王司馬之陝州」0183に「府公既に有り 朝中の舊、司馬應に容らるるべし 酒後の狂（府公既有朝中舊、司馬應容酒後狂）」という例は、このことと同じく「容」の表現とともに用いている。故事を用いつつ（基づく故事を高注は『漢書』蓋寛饒傳とし、陶注は『晉書』謝奕傳とする違いはあるが）、司馬という官職は酒の上での「狂」も許されると述べる句を、陝州司馬として赴任する王建が、上役である陝州刺史・陝虢觀察使の王起と旧知の間柄であることを述べる句と対にしている。

また大和五年（831）、蘇州赴任の際に作られたやはり劉白唱和詩の「贈樂天」0614に、洛陽で白と過ごした日々を表現して「痛飲すれば 連宵酔ひ、狂吟すれば 満坐聴く（痛飲連宵酔、狂吟満坐聴）」という例は、このことと同じく酒の酔いと対にして用いている。先に引いた李白の例や劉の0183の「酒後狂」の表現からもうかがえるように、酩酊した際の高揚感と「狂」は関係の深いものである。また、酔いと対にして「狂吟」が表現されていることからすると、この聯句における「狂取樂」も、主に詩を作る楽しみを指していることが想像できよう。なお、「狂吟」の語は先に引いた曹華の「蘭亭詩」に見えていたが、その後ずつと詩中に用例が見られず、劉白に至って再び用いられるようになった

詩語である。

白自身には百例を超える「狂」の用例があり、白居易における重要なタームとなっている（やはりプラス方向の用例数は確定しがたい）。白居易の「狂」については、二宮俊博氏「洛陽時代の白居易―『狂』という自己意識について」（『中国文学論集』第一〇号、一九八一年）の卓論があるので詳細はそちらに譲ることとし、この聯句と関連する例をいくつか挙げておこう。

元和一三年（818）、江州司馬時代の「洪州逢熊孺登」1092に「靖安院裏 辛夷の下、醉笑 狂吟 氣最も麤なり（靖安院裏辛夷下、醉笑狂吟氣最麤）」という例は、長安での詩酒の遊びを追憶した表現で、酔いと対比しつつ「狂吟」の語を用いている。なお、白には「狂吟七言十四韻」363という詩もある。晩年の會昌四年（844）の作。

また、大和六年（832）の「履道居三首」其三366に「唯だ餘す 耽酒狂歌の客、只だ樂しき時のみ有りて 苦しき時無し（唯餘耽酒狂歌客、只有樂時無苦時）」という例は、酒と対にして「狂歌」の語を用いつつ、その境地を「樂」と表現した例。なお、「唯餘」を那波本は「餘杭」に作るが、宋本に従って改めた。

「取樂」は楽しみを味わう。後漢の張衡の「西京賦」（『文選』二）に天子の狩獵の様子を詠じた後、「樂しみを今日に取り、我が後を恤ふるに遑あらんや（取樂今日、遑恤我後）」という古い用例がある。

唐までの詩においても、曹植の「閨情二首其二」（曹植集校注「三」）に、美女の奏でる音楽を聴いて過ぐす樂しみを描写した後、「樂しみを今日に取り、其の他を恤ふるに遑あらんや（取樂今日、遑恤其他）」と「西京賦」

に基づいて結ぶ例や、張華の「答何劭二首」其一（『文選』二四）に、何劭とともに隠棲した未来を思い描いた後、「從容として餘日を養ひ、樂しみを桑榆<sup>さうゆ</sup>に取らん（從容養餘日、取樂於桑榆）」と終焉の志を詠じて結ぶ例などが見える。

唐に入り、張九齡の「南還湘水言懷」（全四九）に「時なるかな苟<sup>いざし</sup>くも達せずんば、樂しみを取れて 吾が情を遂げん（時哉苟不達、取樂遂吾情）」といい、李白の「敘舊、贈江陽宰陸調」（王本一〇）に「大笑して 同一に酔ひ、樂しみを取らん 平生の年（大笑同一醉、取樂平生年）」というなどの例がある。前者は、帰郷する張九齡が、時運によつて失意のままであるなら、樂しみを追い求めて過ごそうと述べた例、後者は江陽県令の陸調に、ともに酒を酌み交わす樂しみをずっと味わつていこうと述べた例。

劉には例がなく、白には他に壮年期と晩年に一例ずつ（0252・353）、早いほうの例を挙げれば、元和八年（813）、下邳退居時の「東園玩菊」0252に「近<sup>この</sup>い<sup>かた</sup>ろ 年の長じてより來、漸<sup>この</sup>く樂し<sup>め</sup>を取るの難きを覺<sup>おぼ</sup>ゆ（近從年長來、漸覺取樂難）」という。年をとるにつれてだんだん樂しむ機会が少なくなつてゐることを詠じた例。

なお、先にも触れたように、「已容」を四庫全書本・汪本は「已榮」に作つてゐる。こちらであれば、「思ひのままに樂しみを求めることを榮誉とする」の意となろうか。先にいくつか挙げたように「狂」を「容」と関連づけた例は見られたが、「榮」と関連させた表現の例は未見。

「仍任醉忘機」さらに、酔つて機心を忘れるに任せてゐる。

柴注、「仍」が前の句の「已」と呼応してゐて、現代語の「既然…還…」（…である上に、さらに…）と同じであると指摘する。例を見る限り、常に強い累加の意味で用いられるとは限らないようだが、以下、この二つの副詞を呼応させた形で用いた例を挙げてみよう。

唐までの詩には、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」其四「徐幹」（『文選』三〇）に「已に負薪の苦しみを免れ、仍ほ椒蘭の室に遊ぶ（已免負薪苦、仍游椒蘭室）」という一例のみ（文字に異同のある例を除く）。曹丕に仕えることになつて、労役の苦しみから逃れた上に、立派な人々と交わる樂しみも得たと表現する。

唐に入ると例が増え、張九齡の「奉和聖製龍池篇」（全四八）に「飛龍 已に珠潭に向かひて出で、積水 仍ほ銀漢と連なる（飛龍已向珠潭出、積水仍將銀漢連）」といい、孟浩然の「陪盧明府泛舟回作」（全一六〇）に「已に田家の旱を救ひ、仍ほ俗化の訛<sup>あやま</sup>りを醫<sup>い</sup>す（已救田家旱、仍醫俗化訛）」という。前者は累加の意味が強くない例のようで、この池の竜はもはや去つていったが、池をたたえる水は今なお天の川と連なつてゐると述べているのであろう。後者は累加の意味で解することができ、盧明府（盧とも盧象ともいわれる）の治により、農民が旱魃から救われた上に、風俗教化の面でも不穩当なものが正されたという。

劉には呼応させた例が一例、大和五年（831）の劉白唱和詩「酬鄆州令狐相公官舍言懷見寄、兼呈樂天」0669に「已に戎略に通じて 黃石に逢ひ、仍ほ文星を占めて 碧虛<sup>かがや</sup>に耀く（已通戎略逢黃石、仍占文星耀碧虛）」という。天平軍節度使として鄆州（山東省東平県）にいた令狐楚を称えた聯で累加の例、黃石公から兵法を授けられた張良のよう

に將軍としての才能がある上に、天に輝く文昌星のように文才もあると述べたもの。

白には呼応させた例は他に一〇例、仍―已の順に用いた二例を除けば、元和年間から大和八年（834）に至る、すなわち全てこの聯句に先立つ八例があり、いずれも累加で解せるようである。一例を挙げれば、大和七年（833）の劉白唱和詩「劉蘇州寄釀酒糯米、李浙東寄楊柳枝舞衫、偶因嘗酒試衫、輒成長句寄謝之」3223に「舞ふ時 已に覺ゆ 愁眉の展ぶるを、酔ひて後 仍は笑口をして開かしむ（舞時已覺愁眉展、酔後仍教笑口開）」の句がある。ともにこの聯句の参加者である、劉禹錫と李紳からの贈り物に対する返礼の詩で、李からもらった舞衫を着て踊ると悲しみが消えたようであり、劉からもらった酒米の酒を飲むとさらに笑いまで浮かんでくるという。

「任醉」の語は、古い用例未見、唐にも先行例はなく、同時代のものでも元稹の「任醉」0427の詩題に一例のみ。

「忘機」、たくらむ心・俗悪な心を忘れる。「機忘」の形で⑦の聯句の第二二句（劉担当）に見えた。その【語釈】も参照。

ここでは「忘機」に絞って例を挙げよう。ただし、古い例は見えず、唐までの詩にも用例はないようである。

唐に入ると用例が急激に増え、賈賁主の「詠懷」（全七九）に「機を忘るるも 俗に會はすに殊なり、拙を守るも 安きを懷ふに異なれり（忘機殊會俗、守拙異懷安）」といい、李白の「古風」五十首其四十二（王本二）に「吾も亦た心を洗ふ者、機を忘れて 爾に従ひて遊ばん（吾亦洗心者、忘機從爾遊）」というなど、枚挙にいとまがない。前者は難

解だが、機心を忘れ拙を守る生活をしているが、俗世に合わせる安易な道を選んだわけではないという意に解した。後者は⑦の聯句の語釈にも引いた『列子』黃帝の故事を詠じた例、鷗に向かって、機心を忘れてお前と遊びたいと述べている。

劉には元和年間から開成年間にいたる三例（0301・0791・1001）、そのうち元和元～九年（806～814）の作とされる（一説に制作年代未詳とされる）「送春詞」0301に「萬古 今に至るまで 此の恨みを同じうす、一醉して盡く機を忘るるに如くは無し（萬古至今同此恨、無如一醉盡忘機）」という例は酔いと絡めた表現の例。前の部分で、鏡に向かって容貌の衰えを嘆く女性と左遷されて失意の中にある男性を詠じたのを承けて、昔から誰もが抱くこの悲しみを消すには、酒を飲んで機心を忘れるのが一番だと説く。

白には他に元和年間から開成年間に至る五例（1166・2499・2676・2691・3289）、そのうち大和三年の「對酒五首」其一2676に「巧拙賢愚 相ひ是非するも、何ぞ如かん 一醉して盡く機を忘るるに（巧拙賢愚相是非、何如一醉盡忘機）」といい、大和六年の「琴酒」2691に「耳根 所を得て 琴初めて暢び、心地 機を忘れて 酒半ば酣なり（耳根得所琴初暢、心地忘機酒半酣）」という例は、「忘機」と酒を関連させて表現した例。前者の後の句は先に引いた劉の0301の後の句と表現がよく似ていて興味深い。

白居易による四句の前半部分。思う存分楽しみ酔っ払う姿を描くことにより、宴席の楽しさを表現し、続く劉を引き留める二句へとつながる。



## 11・12 捨眷將何適、留歡便是歸

「捨眷」「眷」はかえりみる、目をかける意、引伸して身内や仲間の意となる。一応蔣注に従い、「われわれ仲間を捨てて」と、宴会の列席者をいうことばとして解釈しておいた。柴注・佐久節注は目をかけてくれる人、すなわち裴度を指すと解釈している。また、陶注は家族と解し、朝廷の状況が陰悪なのに鑑みて、洛陽に家族を留めて単身で赴任し、やがては洛陽に帰る計画を立てていることを指すと解釈する。

「捨眷」の語は用例未見。「棄眷」「捐眷」などの形の用例も見当たらないようだ。

「將何適」いったいどこへ行こうというのか。劉禹錫が同州に赴任するため立ち去るのを引き留めることばといえよう。なお「將に何くにか適かんとす」という読みも可能であるが、惜別の思いがより鮮明になると思われるので、「將た」と読み、疑問を強調する働きの副詞と解しておいた。以下に挙げる例も便宜上全て「將た」と読むこととする。なお、「將何」には「何を將て」の意味の場合もあるが、その例と思われるものは除外した。

「將何」の形は古くから多くの例があり、『禮記』檀弓上に「曾子客と門の側に立つに、其の徒趨りて出づ。曾子曰く、爾將た何くにか之く、と（曾子與客立於門側、其徒趨而出。曾子曰、爾將何之）」といひ、『春秋』隱公一年の『左傳』に「邪にして之を詛ふも、將た何の益かあらん（邪而詛之、將何益矣）」というなど、經書から例が見える。前者は出かけようとする者にどこに行くかと尋ねた例、文字は異なる

が、このことと同じく行き先を問う。後者は「どこ」ではなく「何」の例で、邪悪を防ごうとしないでいて、邪悪なことが起こってから呪っても意味がないと述べた例。

經書の他にも、『荀子』非十二子に「今夫れ仁人や、將た何をか務むるや（今夫仁人也、將何務哉）」といい、『莊子』則陽に「又た之を請ふに、老聃曰く、汝將た何くより始む、と（又請之、老聃曰、汝將何始）」というなど多くの例がある。前者は、仁たる者は何に務めるべきであろうかと、自問自答の形で表現した例、後者は諸国を巡りたいという弟子の柏矩に対して、老子がどこから始めるのかと尋ねた例。

唐までの詩にも多くの用例があり、曹植「贈白馬王彪」（『文選』二四）に「太息して 將た何をか爲さん、天命 我と違へり（太息將何爲、天命與我違）」といい、阮籍の「詠懷詩十七首」其一（『文選』二三）に「徘徊して 將た何をか見ん、憂思して 獨り心を傷ましむ（徘徊將何見、憂思獨傷心）」という。前者は兄の曹彰を亡くし、弟の曹彪とも別れなければならぬ運命を悲しんだ例、後者は眠られぬ清夜の思いを詠じた例、ともに非常によく知られた詩句である。

唐に入ってから多くの例があり、劉孝孫の「早發成皋望河」（全）三三には「古を懷ひて 空しく延佇し、逝くを歎きて 將た何をか言はん（懷古空延佇、歎逝將何言）」と、『論語』子罕のいわゆる川上の嘆を故事を用いて、黄河を眺めつつことばを失う様子が描かれ、李白の「古風五十首」其四十四には「君子 恩已に畢るに、賤妾 將た何をか爲さん（君子恩已畢、賤妾將何爲）」と、男性の愛を失ってしまい、どうしてよいか分からなくなった女性が描かれている。

盛唐以降、「將何適」の三字の並びの例も見られるようになり、杜甫の「上水遣懷」（『詳註』二二）には、年老いて弱った身体であてもなくさまよう生活を悲しんで、「羸骸 將た何くにか適く、險を履みて顔益々厚し（羸骸將何適、履險顔益厚）」と述べ、皇甫冉の「題魏仲光淮山所居」（全二四九）には、山に隱棲する魏仲光が宮仕えの自分に行き先を尋ねたことを描いて「我に問ふ 將た何くにか適くと、君の今獨り間なるを羨やむ（問我將何適、羨君今獨間）」と表現する。

劉には「將何」が一例あるが（0952）、「何を將て」の意味の例のようだ。②の聯句の【備考】参照。

白には他に三〇例あるうち、「何を將て」の意味の例と「將」字を補語として用いたと思われる例（358）を除けば、元和年間から開成年間にいたる一四例、一例を挙げれば、元和四年（809）頃の作とされる「新樂府五十首」其四十一「官牛」0165に「一石の沙、幾斤の重さぞ、朝に載せ暮れに載せ 將た何にか用ふる（一石沙、幾斤重、朝載暮載將何用）」の句がある。牛が運ぶ砂の用途を尋ねることにより、新宰相就任時に作られる沙堤のためであることを表現した次の部分を導く例。

「留歡」とどまつたのしむ。その場に残つてゆつくりと楽しみを味わいつくす。佐久節注・柴注のように「留まり歡して」と訓読した方がより原文の意味に近いかとも思われるが、ここでは対句を重視して「歡を留めて」と読んでおいた。以下の例でも動詞＋目的語の構造の語と対にしている例がしばしば見られる。なお、陶注は「歡」を妓女や楽団を指すと解するが、用例を見る限りでは、明らかに妓女や楽団を

指した表現はないように思われる。

古書に例はなく、梁の丘遲の「爲范尚書拜表」（『藝文類聚』四八）に「昔滕公は晷を泗亭に移し、陳遂は權を博進に留む（昔滕公移晷於泗亭、陳遂留權於博進）」というあたりが古い例のようである。滕公夏侯嬰が若い頃、劉邦が亭長をしていた泗上亭に立ち寄つては長い時間話し込んだ故事（『史記』夏侯嬰傳）と、漢の陳遂が微賤だった頃の宣帝と賭博をして楽しんだ故事（『漢書』遊俠・陳遵傳。「博進」は賭博の賭け金）を対にした部分に見える。

唐までの詩に一例のみ。沈約の「長歌行」（陳慶元『沈約集校箋』九）に「局塗 遠策頓き、留歡 奔箭を恨む（局塗頓遠策、留歡恨奔箭）」の句がある。じつくり楽しもうと思うのだが、速く進む時計の針（「奔箭」）が恨めしいというのであろう。前の句は難解だが、ずっと先までの考えが近いところ（局塗）は近い道のりの意で頓挫することをいうと解した。

唐に入り、多くの用例が見えるようになる。張説の「幽州別陰長河行先」（全八七）に「目を寄す 雲中の鳥、歡を留む 酒上の歌（寄目雲中鳥、留歡酒上歌）」という例は、雲間に飛ぶ鳥を眺めながら、この別れの酒宴での歌を楽しもうといい、沈佺期の「送陸侍御餘慶北使」（全九六）に「安んぞ白日を回らすを得ん、歡を留めて 綠樽を盡くさん（安得回白日、留歡盡綠樽）」という例は、太陽を逆行させて時間を止めることはできないから、この緑色の酒を飲んでゆつくりと楽しもうというのであろう。また、李白の「秋獵孟諸夜歸置酒單父東樓觀妓」（王本二〇）では、「歡を留めて 疲るるを知らず、清曉 方に來たり旋る（留

歡不知疲、清曉方來旋」と、疲れも感じないまま夜宴を楽しんでいたら、いつしか朝になったことを述べる。

劉には用例がない。白には他にこの聯句に先立つ三例(2955・3188・3206)がある。一例を挙げれば、「和劉汝州酬侍中見寄長句、因書集賢坊勝事、戲而問之」3206に「朱門宴に陪して 多く轄<sup>かつ</sup>を投じ、青眼歡を留めて 茵に吐くに任す(朱門陪宴多投轄、青眼留歡任吐茵)」という。この聯句と同じ大和九年(835)、この聯句の前のまだ劉が汝州刺史であった時に作られた劉白唱和詩で(劉の作は残っていない)、裴度の集賢坊の家での酒宴において、心ゆくまでくつろぐ様子を表現するのに「留歡」の語が用いられている。

「便是歸」(楽しみを尽くして)それから帰る。これも劉禹錫を引き留めることばということになる。

「便是」の表現、A=Bを表す「便ち是れ」の場合と、「便ち是<sup>こゝ</sup>に」の場合とがあるようだが、ここでは前者の例を挙げる。この表現は古書には見えず、『搜神記』卷一六に見える晋の阮瞻のもとを訪れた客のことばに「即ち僕は便ち是れ鬼なり(即僕便是鬼)」というあたりが古い例ということになりそうである。鬼は存在しないという阮瞻に言い負かされた客が鬼の正体を現す場面でのことば。

詩においても、例は少なく、唐までの詩には一例のみ。梁の王僧孺の「登高臺」(『藝文類聚』四二)に「若し邯鄲の美に非ざれば、便ち是れ洛陽の才なり(若非邯鄲美、便是洛陽才)」という。高い樓台から見える人が、美人でなければ才子であることを表現した句のようだ。

唐に入っても例は少ない。初唐には見えず、盛唐では孫逖に二例見えるのみ、一例を挙げれば、「和左司張員外自洛使入京、中路先赴長安、逢立春日、贈韋侍御等諸公」(全一一八)に「遙かに瞻<sup>み</sup>る 使者の星、便ち是れ 郎官の應なり(遙瞻使者星、便是郎官應)」の句がある。天に見える使者星が、左司員外郎である張説が長安への使いとなったのに応じていることを述べる部分に用いた例。中唐に入って例が増え、寶暉の「従軍別家」(全二七二)に「如今 便ち是れ 征人の婦、好んで迴文を織りて 寶滔に寄す(如今便是征人婦、好織迴文寄寶滔)」というなどの例が見られるようになる。自分が従軍することになって、妻が出征兵士の妻となり、寶滔の妻に習って迴文詩を織っていると述べたもの。

劉には元和年間に一例(3385)と開成年間に一例(3796)、早い方の例を挙げれば、元和一〇年(815)の武元衡暗殺事件に関して作られた「代靖安佳人怨二首」其二3385に、「牆東は便ち是れ傷心の地、夜夜秋螢 飛んで去來す(牆東便是傷心地、夜夜秋螢飛去來)」の句がある。武元衡が自宅の東北隅の塀の外で死んでいたのを表現したもの。

白には用例が多く、元和年間に開成・會昌の間の作とされるものまで、全二四例に及ぶ例がある。中でも、元和二年(817)、江州司馬時代の「重題」四首其三3978に「匡廬は便ち是れ名を逃るるの地、司馬は仍ほ老ひを送るの官爲り(匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官)」という例は名高い。廬山は世俗の名誉から逃れる場所であると述べる。

「是歸」の表現、やはり訓読は「是れ帰る(帰す)」「是に帰る(帰す)」の両方が可能であり、また明確に区別するのも難しいように思われる。

ここではまとめて扱い、「是」が動詞（または代詞）的に用いられていると思われるものは「これ」、連詞的に用いられていると思われるものは「ここに」と読むこととした。

「是歸」の表現も古書には見えないようで、『三國志』薛瑩傳に見える建衡三年（271）に瑩が孫皓に献上した詩に「天 其の心を啟<sup>みちづ</sup>き、東南 是れ歸す（天啟其心、東南是歸）」の句が見えるあたりが古い用例のようである。瑩の父である薛綜が、天の導きによつて漢末の乱を避けて東南の地に依つたことを表現した例。

唐までの詩においては、他には晉の裴秀の「大蜡詩」（『藝文類聚』五）に「勤に報ゆるは 伊<sup>い</sup>れ何ぞ、農功 是れ歸す（報勤伊何、農功是歸）」という一例が見えるのみ。勤勉に農作業を行ったことに對する神の報いとして、作物の豊かな稔りがあつたことを述べた句のようである。

唐に入り初唐から多くの例が見えるが、盛唐までの例はいずれも杜甫の「絶句二首」其二（『詳註』卷二三）の有名な「今春 看<sup>み</sup>又た過ぐ、何れの日か 是れ歸る年ぞ（今春看又過、何日是歸年）」に見えるような、「是歸○」の形の例。

中唐大曆期になつて、皇甫冉の「送裴闌」（全二四九）に「道は毗<sup>ひ</sup>陵に向かふも 豈に是れ歸らん、客中 誰と與<sup>とも</sup>にか 春衣を換<sup>か</sup>へん（道向毗陵豈是歸、客中誰與換春衣）」といい、盧綸の「送從舅成都丞廣歸蜀」（全二七六）に「巴字 天邊の水、秦人 去りて是に歸る（巴字天邊水、秦人去是歸）」というなどの例がある。前者は、裴闌（未詳）の向かう毗陵（江蘇省常州市）が皇甫冉の故郷である丹陽（江蘇省丹陽市）に近いにも関わらず一緒に帰れないことを述べた句か。後者は、母方

の叔父である韋廣が長安の人でありながら蜀の成都へと帰って行くことを表現した例。

劉に一例、大和六（832）八年（834）の蘇州刺史時代の「送元簡上人適越」0351に「孤雲 岫<sup>き</sup>を出でて 本と依る無く、勝景 名山 即ち是れ歸す（孤雲出岫本無依、勝景名山即是歸）」という句がある。雲のように自由な元簡上人が、風景の美しい場所や名山を自分の落ち着き場所と考えていることを表現した例。

白には他にこの聯句に先立つ三例（0336・0978・2710）、先に「便是」の用例に引いた「重題」四首其三0978の直後の句に「心泰<sup>やす</sup>く身寧<sup>やす</sup>きは 是れ歸する處、故郷 何ぞ獨り 長安にのみ在らんや（泰身寧是歸處、故郷何獨在長安）」という例も名高いが、0336とともに「是歸○」の形の例。残る大和六年（832）の劉白唱和詩「和楊師皋傷小姬英英」2510に「人間には夢有るも 何ぞ曾<sup>かつ</sup>て入らん、泉下には家無く 豈に是れ歸らん（人間有夢何曾入、泉下無家豈是歸）」の句がある。若くして亡くなった妓女の魂が、あの世で帰る家もなくさまよっているだろうと述べた例。

白居易の担当部分の後半二句、宴席の楽しさを詠じた二句を承けて、劉禹錫を引き留めることば。ともに歓を尽くしたいという思いが込められている。

白居易担当の四句は、前半で宴席の楽しさをいい、後半ではそれを承けて、それなのに我々を置いていくのか、どうか旅立つ前にもっと楽しんでほしい、と劉禹錫に語りかけるものとなっている。



# 13・14 鳳儀常欲附、蚊力自知微

「鳳儀」鳳凰のような威儀。⑧の第五句（劉担当）に「威鳳」の語が見えた。その【語釈】も参照。⑧の「威鳳」が白居易を指していたように、ここでも劉禹錫を喩えている可能性もあるが、四句全体を考えると裴度のことを指していると思われる。

柴注も指摘するように、鳳凰の儀容を表現した例は、古く『尚書』益稷に「簫韶九成すれば、鳳皇來儀す（簫韶九成、鳳皇來儀）」と見え、その孔安國傳に「雄を鳳と曰ひ、雌を皇と曰ふ。靈鳥なり。儀は、容儀有るなり。備樂九奏して鳳皇を致さば、則ち餘の鳥獸は九を待たずして率ひ舞ふ（雄曰鳳、雌曰皇。靈鳥也。儀有容儀。備樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸不待九而率舞）」とある。舜の「簫韶」の曲を九回演奏したところ、鳳凰も来て威儀を示したという記述である。「儀」の解釈には諸説あるようだが、古注に従う限り、威儀があるの意ということになる。これに基づく「鳳儀」の語は、潘岳の「笙賦」（『文選』一八）に、笙の形が鳳凰をかたどっていることを「黃鍾に基づいて以て韻きを擧げ、鳳儀を望んで以て形を擧げ（基黃鍾以舉韻、望鳳儀以擧形）」と表現し、『魏書』常珍奇傳に引く常珍奇の上表文に天子の威容を「伏して惟るに陛下は龍姿鳳儀にして、光は四表に格る（伏惟陛下龍姿鳳儀、光格四表）」するなど、文には用例が散見する。

ただ、詩における用例は少なく、唐までの詩には二例のみ、梁の昭明太子の「和上遊鍾山大愛敬寺」（『昭明太子集』一）に「斑斑として仁獸集まり、足足として翔鳳儀す（斑斑仁獸集、足足翔鳳儀）」といい、陸印らが作ったとされる北齊の郊廟歌辭のうち「元會大饗」

の際の「文舞將作、先設階步辭」（『隋書』音樂志中）に「鳳は儀し龍は至り、我が雍熙を樂しむ（鳳儀龍至、樂我雍熙）」という。前者は、武帝を称えて鳳凰が集まると表現したもの、「足足」は鳳凰の鳴き声の形容。後者は、宮廷の音楽の中で太平を言祝ぐために竜や鳳凰が集まると表現したもの。

唐に入っても用例は非常に少なく、この聯句に先立つ例はないようだ。劉白にも用例はない。

なお、鳳凰について「儀」と表現する例は、少しではあるが残されており、岑文本の「奉和正日臨朝」（全三三）に元日の靈妙な様子を表現して「拂蜺 九旗映じ、儀鳳 八音殊なる（拂蜺九旗映、儀鳳八音殊）」といい、杜甫の「幽人」（『詳註』二三）に仙道への憧れを表現して「靈鳳 赤霄に在り、何當か 一たび來儀する（靈鳳在赤霄、何當一來儀）」というなどの例がある。ただし、劉白にはこの例も見られないようだ。「鳳儀」、汪本は「風儀」に作る。こちらであれば、威儀ある風采の意となる。対句からして「鳳儀」の方が正しいと思われるが、一応例を挙げておこう。

「風儀」は古書には見えないよう、『世說新語』雅量に「庾太尉は風儀偉長にして、輕しくは舉止せず（庾太尉風儀偉長、不輕舉止）」といい、王儉の「褚淵碑文」（『文選』五八）に「風儀は秋月と明るさを齊しうし、音徽は春雲と潤ひを等しうす（風儀與秋月齊明、音徽與春雲等潤）」という。前者は、庾亮が堂々たる風体であったことを表現したものの、後者は褚淵の風采がすぐれていることを表現したもの。

唐までの詩に一例、北齊の邢邵の「三日華林園公宴詩」（『藝文類聚』四）

に「五丞 光景に接し、七友 風儀を樹つ（五承接光景、七友樹風儀）」の句がある。舜の七友の故事を用いて、天子の側近たちの立派な風采を表現した例。

唐に入り、この聯句に先立つ例が二例。王灣の「哭補闕亡友慕母學士」（全一一五）に「詞學は張平子、風儀は褚彦回（詞學張平子、風儀褚彦回）」というのは、先に引いた王儉の「褚淵碑文」に基づきつつ、詩題にいう慕母某が、張衡の文才と褚淵の風貌を併せ持っていたことを表現した例（彦回は褚淵の字）。皎然の「妙喜寺高房期靈澈上人不至、重招之一首」（全八一五）に「言笑 形外に阻まれ、風儀 想中に覲る（言笑形外阻、風儀想中覲）」という例は、約束しながら来なかった靈澈の風姿を思い浮かべるといふ例。

劉白ともにこの聯句より後の例が一例ずつ。

劉の開成二年（837）の「送李戸部侍郎自河南尹再除本官歸闕」(211)に「想ひ到る 金門に通籍を待ち、一時 驚き喜びて 風儀を見るを（想到金門待通籍、一時驚喜見風儀）」という例は、李珣が再び戸部侍郎となつて朝廷に戻った時、皇帝が彼の風采を見て再会を喜ぶ様子を想像した句（底本は「通籍」を「稱籍」に作るが、紹興本によって改めた）。

白の會昌元年（841）の「昨日復今辰」(367)に「風儀と名號と、別に是れ一主人（風儀與名號、別是一主人）」という例は、致仕した後の自分が、風体も称号も別人のようになったと詠する例。

〔常欲附〕いつも付随したいと思っていた。威儀ある裴度につき従いたいと、いつも思っていたことをいう。

柴注、「附」は有力な人に付随する意として、『後漢書』光武紀上の建武元年の条に載せる耿純の語に「其の計固より其の龍鱗に攀ち、鳳翼に附して、以て其の志す所を成さんと望むのみ（其計固望其攀龍鱗、附鳳翼、以成其所志耳）」というのを引く。劉秀に付き従って願いを實現しようとする人々のために即位せよと促すことば。なお、李賢の注は揚雄の『法言』淵騫に「龍鱗に攀ち、鳳翼に附し、異以て之を揚ぐ（攀龍鱗、附鳳翼、異以揚之）」というのを引いている。

鳳凰について「附」という例は、唐までの詩では一例のみ。作者不詳の晉の「拂舞歌詩五篇」其「白鳩篇」（『宋書』樂志四）に「龍に扳ち鳳に附して、目は望み身は輕からん（扳龍附鳳、目望身輕）」という句がある。天子の徳を称える中で、竜や鳳凰のような天子に付き従いたいという願いを述べたもののようである（「扳」は「攀」の音通）。

唐に入り、李白の「猛虎行」（王本六）に「蕭曹 曾て沛中の吏と作る、龍に攀ち 鳳に附す 當に時有るべし（蕭曹曾作沛中吏、攀龍附鳳當有時）」といい、杜甫の「洗兵行」（『詳註』六）に「龍に攀ち鳳に附して 勢ひ當たる莫く、天下盡く化して 侯王と爲る（攀龍附鳳勢莫當、天下盡化爲侯王）」というなどの例がある。前者は、蕭何や曹參ら漢の名臣も小吏だった頃があるのだから、君も明君に従って功績を立てるだろうと張旭を励ました句、後者は、安祿山の反乱における功績によって權勢を誇る人々も、結局は天子に付き従って得たものであると表現した句。

劉白には、鳳凰について「附」と表現した例もないようだ。

「蚊力」 蚊のような力、微力。自己の力の謙讓表現。

陶注も引く『莊子』秋水に「且つ夫れ知は是非の竟を知らずして、猶ほ莊子の言を觀んと欲するは、是れ猶ほ蚊をして山を負ひ、商蜺をして河を馳せしむるがごときなり、必ず任に勝へず（且夫知不知是非之竟、而猶欲觀於莊子之言、是猶使蚊負山、商蜺馳河也、必不勝任矣）」とあるのに基づく表現。莊周の言説を理解できないという公孫龍に対し、魏牟が、浅はかな知恵で高邁な思想を理解しようとする無謀さを説いた部分。まるで蚊に山を背負わせ、ヤスデに大河を走らせるようなものだという（なお、蚊が山を背負う比喻は『莊子』應帝王にも見えている）。

「蚊力」の用例は極めて少なく、先立つ例は、文章では初唐の李邕の「謝賜慰諭表」（『全唐文』二六一）に一例のみ、「蚊力 山を負ひ、其の重きに勝へず（蚊力負山、不勝其重）」という。皇恩に報いたいのが、力不足であることを表現した例。

詩においても一例のみ、柴注も引く初唐の韋承慶の「直中書省」（全四六）に「螢光 日に向かひて盡き、蚊力 山を負ひて疲る（螢光向日盡、蚊力負山疲）」という。中書省に宿直した際の思いを詠じたもので、力不足で任に堪えないことを表現している。

同時代の文章では蔣注も引く馮宿「爲馬總尚書謝除彰義軍節度使表」（『全唐文』六二四）に一例、「鴻私の薦及ぶも、蚊力何ぞ堪へん（鴻私薦及、蚊力何堪）」という。馬總の代作で、彰義軍節度使に除せられた皇恩に感謝しつつ、任に堪えないと謙遜する例。

管見の及んだ限りでは、以上が唐代までの「蚊力」の用例の全ての

ようで、晩唐にも用例はないようである。「蚊力」以外の表現に目を転じて、特に詩においては、蚊が詠じられること自体が少なく、杜甫の「入衡州」（『詳註』二三）に「氛埃 必ず掃はんと期するも、蚊 蚋 焉んぞ能く當たらん（氛埃期必掃、蚊蚋焉能當）」という例が目につくくらいようだ。

劉の「蚊」の例は詩題に一例（「聚蚊謠」0042）とその詩を含む詩中に二例（0042・0043）、いずれも元和元～九年（806～814）の朗州司馬時代の作ともさらに若い頃の作ともされる寓言詩で、小さいながら集団で害をなす存在（0042）としてや、鳥によってすぐ食べられてしまう虫の代表（0043）として描かれており、微小なものというイメージで用いてはいるが、自己の無力さを謙遜する比喻の例はないようである。

白には詩題に一例（「蚊蟆」0558）、その詩を含む詩中に六例あり（0558・0854・0880・1246・2363・3667）、元和年間から會昌年間にわたっている。ほとんどが大量発生して人を蚊に刺す害虫として描かれており、晩年の一例のみ（3667）は異なるものの、故事に基づきつつさらに小さい虫を表現するのに用いられており、やはり自己の力不足を謙遜して表現する例はない。

〔自知微〕自分で自分が微小であると知っている。自分が微力であることは分かっている。

「知微」の表現は、古く『周易』繫辭傳下に「君子は微を知って彰を知り、柔を知って剛を知る（君子知微知彰、知柔知剛）」といい、『禮記』中庸に「遠くを知るに近くに之き、風を知るに自るところに之き、微を

知るに顯に之くは、與に德に入るべし（知遠之近、知風之目、知微之顯、可與入德矣）」というなどの例が見える。前者は解釈に諸説あるようだが、孔穎達の解釈に従えば、初めの微かな兆しから後の顯著な変化を悟り、柔らかなさから後の剛直を知ると述べる例。後者は君子の徳について述べた部分、遠くのことを知るには近いものから、風を知るにはその生じたところから、微かなものを知るには明らかなものから始めるべきであるという例。

その他、『荀子』致士に人の師となる四つの条件を挙げる一つに、「微を知りて論ずれば、以て師となるべし（知微而論、可以爲師）」という。また『韓非子』難四には「微を知るを之れ明と謂ひ、赦す無きを之れ嚴と謂ふ（知微之謂明、無赦之謂嚴）」という。君主に必要な「明」「嚴」という資質を説明したことば。

以上のように、散文では古くから多くの例があるが、詩における用例は少ない。唐までの詩には三例のみ。王粲の「贈文叔良」（『文選』二三）に「情を探るに華を以てし、著らかなるを覩て微かなるを知れ（探情以華、覩著知微）」というのは、使者として益州へ向かう文穎に対し、顯著なものを見て細かなことを察するよう助言した例。齊の袁浮丘の「皇太子釋奠詩」（『文館詞林』一六〇）に「曾ち是れ 微を知り、情を降して敦く勉む（曾是知微、降情敦勉）」というのは、積奠の詳細を知り、へりくだって礼を実施する意味のようである。沈約の「贈劉南郡季連詩」（『文館詞林』一五八）に「灼灼たる中壘、奥に入り微を知る（灼灼中壘、入奥知微）」というのは、劉季連を中壘校尉となった劉向に喩えて、その深く詳しい知識を称えた例。

唐に入ると極端に例が少なくなり、先立つ例はなく、劉白にも用例がない。

以上挙げた例は、いずれも微細で分かりにくいことを知るという意味で用いられており、ここで自分の力の小ささを知るという用い方がされているとは異なっているといえよう。この意味での用例は未見。

李紳の担当部分の前半二句。自分の力不足を痛感しているので、高貴な裴度の後ろだてを得たいと普段から思っていたと述べ、裴度の協力を求める次の二句へとつながって行く。

#### 15・16 願假罇疊末、膺門自此依

〔願假罇疊末〕「罇疊」は酒樽。「罇疊末」で酒宴の末席の意味か。願わくは酒宴の末席にいることに借りて。

「願假」の表現は、古く『春秋』昭公四年の『左傳』に、「君若し苟も四方の虞ひ無くんば、則ち願はくは寵を假りて以て諸侯に請はん（君若苟無四方之虞、則願假寵以請於諸侯）」と見える。楚が諸侯の会合への出席を晋に申し入れた際の使者のことばで、出席することを「寵を假りる」と表現したもの。

また、宋玉の「神女賦」（『文選』一九）にも「須臾を假りんことを願ふも、神女は遽かなりと稱す（願假須臾、神女稱遽）」と見える。神女との別離の場面で、もうしばらくいてほしいと願うが、急ぐからといって去っていくことをいう。



唐までの詩においては、陸機の「爲顧彦先贈婦二首」其一（『文選』二四）に「願はくは歸鴻の翼を假り、鰾飛して 江の汜に游ばん（願假歸鴻翼、鰾飛游江汜）」といい（胡刻本は「浙江汜」に作るが、集注本によって改めた）、石崇の「王明君詞」（『文選』二七）に「願はくは飛鴻の翼を假り、之に乘りて 以て退く征ばん（願假飛鴻翼、乘之以退征）」というなどの例がある。どちらも鳥の翼を借りて、大空を飛んで帰りたいと願う例。

また、ことと同じく「末」の文字とともに用いた例もあり、梁の王臺卿の「奉和望同泰寺浮圖詩」（『廣弘明集』三〇）に「願はくは舟航の末を假りん、彼岸 誰か廣しと云はん（願假舟航末、彼岸誰云廣）」の句がある。悟りへと渡してくれる舟の末席を借りることができれば、彼岸への道のりも広くはないという例。

唐に入り、初唐に例がなく、盛唐詩にも一例のみ。李白の「陳情贈友人」（王本一二）に「願はくは東壁の輝きを假り、餘光 貧女を照らさん（願假東壁輝、餘光照貧女）」という。これは『列女傳』辯通に見える、齊の貧女徐吾の故事を用いた表現。徐吾は隣家の婦人と一緒に夜糸を紡いだが、貧しくてしばしば燭が途切れたため、もう一緒に紡ぐのは辞めようといわれ、東壁（星の名）の余光ほどの光を惜しむのかと抗議したという。

中唐大曆期に入ると、錢起の「清泥驛迎獻王侍御」（全二三六）に、自らを小さな鷓鴣に喩え、王侍御を御史臺（憲臺）の鳥に喩えて、「鷓鴣 羽翼無し、願はくは憲烏に假りて翔ん（鷓鴣無羽翼、願假憲烏翔）」というなどの用例が散見するようになる。ただ、劉白には例がない。

「罇（樽・尊・罇）壘」の語、古い用例は未見。

唐までの詩に一例、謝朓らの聯句「阻雪」（『謝宣城集校注』五）の謝朓担当部分に「罇壘 未だ澹はざるが如し、況んや乃ち音儀を限らるをや（罇壘如未澹、況乃限音儀）」という。雪のため会えないで、酒器が汚れたままになっていることを表現する。

唐に入っても用例は少なく、先立つのは二例のみ。一つは初唐の褚亮の作とされる「明堂樂章」の「肅和」（全一〇および三二）に「樽壘 盈ち列なり、羽を樹てて交々映ず（樽壘盈列、樹羽交映）」という例。酒樽が並んで饗宴の準備が整っていることを表現した句であろう。もう一例は杜甫の「贈特進汝陽王二十韻」（『詳註』一）に「樽壘 極浦に臨み、鳧雁 張燈に宿る（樽壘臨極浦、鳧雁宿張燈）」という。汝陽王李璣と謁見する際の宴席の描写。

劉には例がなく、白には元和年間の若い頃に二例。一つは元和五年（810）の「秦中吟十首」其七「輕肥」0801に「罇壘 九醞溢れ、水陸八珍を羅ぬ（罇壘溢九醞、水陸羅八珍）」と見えるもの、貴人の家における酒食の贅沢を表現した句。もう一つは元和九年（814）の下邳服喪中の「渭村退居、寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩一百韻」0807に「樽壘 聖酒を分かち、妓樂 借仙侶を借る（樽壘分聖酒、妓樂借仙侶）」と見えるもの、都でのかつての楽しい遊びを追憶した句。

以上の例からすると、かなり豪華な酒器というイメージがあったように思われる。

〔膺門自此依〕李膺の門にこれから依りたいものだ。

「膺門」は諸注にいうように、李膺の門をいう。後漢の李膺は廉直な人物で名声があり、彼の知見を受けた者は「龍門に登る」といわれたという。裴度を指している。

諸注も引く通り、『後漢書』黨錮傳の李膺の条に「是の時朝廷は日に亂れ、綱紀は積弛するも、膺獨り風裁を持し、以て聲名自づから高し。士の其の容接を被る有る者、名づけて登龍門と爲す（是時朝廷日亂、綱紀積弛、膺獨持風裁、以聲名自高。士有被其容接者、名爲登龍門）」とあり、李膺の注に「魚を以て喩へと爲すなり。龍門は、河水下る所の口、今の絳州龍門縣に在り。辛氏三秦記に曰く、河津は一に龍門と名づく。水險にして通ぜず、魚鼈の屬能く上る莫し。江海の大魚、龍門の下に薄り集まること數千なるも、上るを得ず、上れば則ち龍と爲るなり、と（以魚爲喩也。龍門、河水所下之口、在今絳州龍門縣。辛氏三秦記曰、河津一名龍門。水險不通、魚鼈之屬莫能上。江海大魚薄集龍門下數千、不得上、上則爲龍也）」という。

有名な故事であり、李膺傳の後の部分にも「時に侍御史の蜀郡の景毅の子の顧、膺の門徒爲り（時侍御史蜀郡景毅子顧、爲膺門徒）」と「膺門徒」の形で見え、また同書孔融傳にも李膺の名声を聞いて、「（孔融 其の人を觀んと欲し、故に膺の門に造る（融欲觀其人、故造膺門）」と見えるが、その後の「膺門」の語の用例は少なく、他にこの意味の先行する例を見ない。顔延之の「楮白馬賦」（『文選』一四）に「膺門 沫は楮く、汗溝 血を走らす（膺門沫楮、汗溝走血）」と見えるのは、馬の部位の名称である。

詩においても、先行する例は未見、劉白にも用例がない。

ただ、有名な「登龍門」の故事を用いた例は多く、唐までの詩においても、梁の朱超の「奉和登百花亭懷荊楚」（『古詩紀』九三）に「若し鵬舉の便に因らば、重ねて上らん 龍門の中（若因鵬舉便、重上龍門中）」と、元帝によってしたいという思いを詠じ、陳の阮卓の「賦得蓮下遊魚」（『文苑英華』三三〇）に「未だ上らず 龍門の路、聊か戯る 芙蓉の池（未上龍門路、聊戲芙蓉池）」と、魚を詠じた賦得の詩にこの故事を用いるなどの例が見られる。

唐詩においても、杜正倫の「冬日宴于庶子宅、各賦一字、得節」（全三三）に「李門 余妄りに進み、徐榻 君恆に設く（李門余妄進、徐榻君恆設）」といい、李白の「贈崔侍御」（王本九）に「點額して龍と成らずんば、歸り來たりて 凡魚に伴はん（點額不成龍、歸來伴凡魚）」というなどの例がある。前者は、後漢の陳蕃が徐穉の來訪時のみ榻を設けた故事と対にして、李膺のごとき于庶子の知遇を得ている喜びを詠じた例、後者は、失意の崔侍御を、竜になれず普通の魚と仲間になる鯉に喩えた例。

以上の例でも明らかのように、さまざまな表現をしようるので正確な数は把握しがたいが、劉白にもこの故事を踏まえた例は見られる。聯句に先立つものをそれぞれ一例ずつ挙げておこう。

劉の大和三年（829）の劉白唱和詩「遙和白賓客分司初到洛中、戲呈馮尹」063に、「聞道く 龍門の峻、還た 上客に因りて開くと（聞道龍門峻、還因上客開）」という例は、河南尹の馮宿を李膺に喩え、白居易をその上客に喩えて表現したもの。白の元和一三年（818）、江州司馬時代の「點額魚」133に「龍門に點額す 意は何如、紅尾 青髻 却つて初めに

返る（龍門點額意何如、紅尾青鬢却返初）」という例は、左遷された自分の姿を、竜になれず引き返す魚によって表現したもの。

「自此」の表現は、古く『禮記』檀弓上に、士のために誄が作られるようになった起源を述べて「士の誄有るは、此より始まるなり（士之有誄、自此始也）」と見える。また、同書祭義には「衆の服すること此による（衆之服自此）」とある。これは注に「自、由也」とあるように動詞の用法で、民衆が聖人の教えに従うのは、上述の理由によるのだと述べたもの。

他に『莊子』天地にも「今子<sup>し</sup>は賞罰して、民は且<sup>また</sup>に不仁ならんとす。徳は此より衰へ、刑は此より立ち、後世の亂は此より始まらん（今子賞罰、而民且不仁。徳自此衰、刑自此立、後世之亂自此始矣）」という例がある。堯・舜に仕えた後に隠居した理由を禹に尋ねられた伯成子高が答えたことば。禹が賞罰を行ったことによって、世の乱れが始まったことを述べる。

唐までの詩にも多くの例があり、顔延之の「秋胡詩」（『文選』二二）に「嘉運 既に我に従ひ、欣願 此より畢<sup>を</sup>る（嘉運既我従、欣願自此畢）」と見え、謝朓の「和王著作八公山詩」（『文選』三〇）に「長蛇固<sup>まこと</sup>に能く翦<sup>き</sup>り、奔鯨 此より曝<sup>さら</sup>す（長蛇固能翦、奔鯨自此曝）」と見える。前者は、秋胡子と結婚した妻が、結婚という幸運が自分に訪れ、喜びを願っていたのがこれで成し遂げられたと述べた例。後者は、晉に來寇した苻融と苻堅を長蛇と奔鯨に喩え、謝玄が八公山で彼らを破ったことを、それが切り刻まれ死体を曝したと表現した例。

唐に入り、陳子昂の「感遇詩三十八首」其十三（全八三）に「徂

落<sup>まさ</sup> 方に此よりす、感歎 何れの時にか平らがん（徂落方自此、感歎何時平）」というのは、春が来て夏が訪れると、凋落の季節はこの時すでに始まっていると述べた例のようだ。また、杜甫の「枏樹爲風雨所拔歎」（『詳註』一〇）に「我に新詩有るも 何れの處にか吟ぜん、草堂此より 顔色無し（我有新詩何處吟、草堂自此無顔色）」というのは、成都の草堂のそばにあった楠が風で倒れたため、これから草堂は色を失ってしまったと嘆く例。

劉には詩中に三例（0130・0684・0873）、いずれも聯句に先立つ例、一例を挙げれば、大和六年（832）の劉白唱和詩「和白侍郎送令狐相公鎮太原」0684に「邊庭此より 烽火無く、節を擁<sup>よう</sup>し還り來たりて 紫微に坐せん（邊庭自此無烽火、擁節還來坐紫微）」という。齊こそが太原に赴任したので、これからは異民族の侵入が起らず平和になり、やがて都に帰るだろうと想像した句。

白には、永貞元年（805）から開成年間に及ぶ長い期間に七例。そのうち、最も早い永貞元年（805）の「永崇里觀居」0179を挙げれば、その冒頭に「季夏 中氣の候、煩暑 此より收まる（季夏中氣候、煩暑自此收）」の句がある。立秋が近づき、これから涼しくなると述べた例。

李紳はここで「門」について「依」の文字を用いている。ここでは実際の門というより（李膺の）一門・門下というような意味ではあるが、門について「依」と表現する例も挙げておこう。ただ、管見の及んだ限りではこの例は非常に少なく、唐までの詩には例がなく、散文においても『宋書』禮志二に見える元嘉一三年の有司の上奏文に「其れ六門の内は、既に州郡縣の部界に非ざれば、則ち合<sup>まぎ</sup>に門外に依るべから

ず（其六門内、既非州郡縣部界、則不合依門外」という例があるのみのようだ。高級官僚が道を通行する際の札に関するもので、この場合、「依門外」の形であり、さらに門外における規定に依拠することはできないの意味であろうから、かなり異なった例といえよう。

唐に入り、先立つ例が三例見えるようだが、それぞれに問題がある。

一つは、杜甫の「遣興五首」其二（『詳註』七）に「家を擧げて鹿門に依れば、劉表 焉んぞ取るを得ん（擧家依鹿門、劉表焉得取）」という例。ただし、この「鹿門」は山名であり、後漢末の龐徳公が一家で鹿門山に住んだことを表現したもの。さらに文字の異同もあって、『詳註』は「依」を「隱」に作る本文による。

二つ目は、李端の「贈康洽」（全二八四）に「後輩は輕肥にして 衰朽を賤しみ、五侯の門館 因依するを許す（後輩輕肥賤衰朽、五侯門館許因依）」という例。開元天寶の時期に活躍した宮廷樂府作家である康洽が、年老いて零落し、後輩にあたる貴族たちの邸宅を頼っているのを許されることを述べたもの。「門館」「因依」の形で用いられている。

三つ目は暢當の「春日過奉誠園」（全二八七）に「桐を見れば 猶ほ井に近く、柳を看れば 尙ほ門に依る（見桐猶近井、看柳尙依門）」という例。もと馬燧の邸宅であった奉誠園の桐と柳が、かつての邸宅を偲ばせることを述べたもので、柳が門のそばに立っていることを「依門」と表現する。この表現自体には問題はないのだが、馬燧の邸宅が奉誠園となったのは貞元末年のことであり、詩の結びに科挙に及第したあかつきには再訪したいの思いが述べられているので、大曆期の暢當の作ではないとされており、この聯句に先立つ例であるかどうか不明。

劉白には「門」に「依」の文字を用いた例はない。

李紳の担当部分の後半二句。故事を用いつつ、裴度の力添えによって出世したいという願いを詠ずる。

以上、李紳の結びの四句は、自己を卑下して裴度を持ち上げ、裴度と縁が結べた喜びと彼の援引を願うことばということになる。劉との再会を喜ぶというのが聯句のテーマだったはずだが、そこから外れてしまっているように思われる。

#### 【備考】

大和九年（835）、同州に赴任する途上に洛陽に立ち寄った劉禹錫との邂逅の喜びを詠じた聯句。柴注、詩題に「遇」といい「偶」というところから、予定外の人事であった可能性を指摘するが、そうであるとすれば、この再会も予期せぬ出逢いだったのかもしれない。だとしたら、彼らの再会の喜びもひとしおであったと思われる。

この聯句で注目されるのは、【語釈】でも記したように、李紳の結びの四句が裴度に対する称賛と援引を願うことばで終始しており、劉との邂逅の喜びという聯句の主題がほとんど感じられない点であろう。裴度に対する称賛の思いは参加者共通の思いということなのではあるが、主賓の劉の句であればまだしも、陪席の李紳の句としては特殊と思われ、例えば白の担当部分と比べると、かなり趣が異なるように感じられる。先述のように、これが予期せぬ再会であったとするなら、その喜びを詠じていないのは、一層奇妙なことといえるのではないだ



ろうか。

この四句は、聯句の他の参加者への言及がなく、酒宴の描写も単に席に連なっているというのみであるため、まるで李紳個人の思いを詠じて裴度に贈った詩のようであり、それと関係があるかどうかは分からないが、この四句は、次の⑩の聯句の李紳の担当部分二箇所とともに、独立した絶句「和晉公三首」として、『萬首唐人絶句』に収められている。

なぜこのようなことになったのであろうか。【参加者】の項目で述べたとおり、現存する資料から見ると限りでは李紳が参加した初めての聯句であるから、とにかく裴度に気に入られたという強い願いがあったのだろうか。あるいは単に聯句に慣れていないためということもあるのかもしれない。または、予期せぬ再会だった可能性があるということが、何か時間的制約に関係があったとしたら、慌てて結びの形を作ろうとして、全体への心配りを欠いてしまったのだろうか。担当が一回ずつで全一六句というのは、長篇化する傾向のある後期の聯句としては短いといえるが、これもやはり時間的制約と関わっていた可能性もある。

実際の所はよく分からないが、ほぼ同時期に作られた次の⑩の聯句では、李紳も主題に沿った四句を詠じているといえ、軌道修正を試みているように思われる。ただ、それでも他の参加者の担当部分に比べると、絶句として読まれていることが示すように、李紳の四句は独立性が強く、座の雰囲気を楽しむ要素が少ないようにも思われる。この時期に作られた三首の聯句のうち、最後の⑪の聯句に李紳が参加していないのは、聯句に対する姿勢が裴度・劉白とやや異なっていたため

なのかもしれない。

この点については、次の⑩の聯句の【備考】において、再び考えてみることにしたい。なお、この聯句とほぼ同時期に作られたと思われる唱和詩があるが、それについては最後の⑪の聯句の【備考】において触れることにする。